2026年04月16日　インフラ「自分ごと」シンポジウム

# INVISIBLEをVISIBLEにする仕掛け

松田曜子（京都大学防災研究所・准教授）

# 「自らの命は自らが守る」

…目指す社会として、「住民が『自らの命は自らが守る』意識を持って自らの判断で避難行動をとり、行政はそれを全力で支援するという住民主体の取り組み強化による防災意識の高い社会を構築する必要性…

新たな避難情報に関するチラシ（2021年　内閣府ホームページ）

平成30年7月豪雨では、大雨特別警報が11府県に発表される記録的な大雨により、岡山県・広島県・愛媛県を中心に河川の氾濫、土砂災害等が多数発生し、死者・行方不明者が200名を超え、昭和58年8月豪雨以来死者数が初めて100名を超える大惨事となった。この未曽有の豪雨災害を教訓とし避難対策の強化を検討するため、中央防災会議防災対策実行会議の下に設置された平成30年7月豪雨による水害・土砂災害からの避難に関するワーキンググループでは、目指す社会として、「住民が『自らの命は自らが守る』意識を持って自らの判断で避難行動をとり、行政はそれを全力で支援するという住民主体の取組強化による防災意識の高い社会を構築する」必要性が示された。この報告を踏まえ平成31年3月に「避難勧告等に関するガイドライン」を改定し、居住者等が災害時にとるべき避難行動が直感的にわかるよう避難情報等を5段階の警戒レベルに整理し、わかりやすく情報提供できるよう改善した。

令和元年台風第19号(令和元年東日本台風)では、1都12県309市区町村に大雨特別警報が発表され、国及び県管理河川において142箇所が決壊する等、同時多発的かつ広範囲に甚大な被害が発生した。これら豪雨においても、避難をしなかった、避難が遅れたことによる被災や、豪雨・浸水時の屋外移動中の被災、また高齢者等の被災が多く、いまだ住民の「自らの命は自らが守る」意識が十分であるとは言えず、また、警戒レベルの運用により避難情報等は分かりやすくなったという意見がある一方で、避難勧告で避難しない人が多い中で、警戒レベル4の中に避難勧告と

避難情報に関するガイドライン（2021年5月改定）はじめに

避難に時間のかかる
高齢者や障害のある人は、
警戒レベル3高齢者等避難で
危険な場所から避難
しましょう。

…これら豪雨においても、…また高齢者等の被災が多く、いまだ住民の「自らの命は自らが守る」意識が十分であるとは言えず…

# 「自らの命を自ら守れる」人はどこにいるか？

- あなたは「自分の命を自分で守れる」か？
- あなたの家族は「自分の命を自分で守れる」人か？
- 「自分の命を自分で守れる」人はどこにいるか？

- 私の答え「そんな人はどこにもいない」
  - より正確には、以前の答え「少なくとも私は自分の命を自分で守れるし、多くの人もそう。しかし、世の中には自分のことを自分で守れない人もいるので、そういう方のことを私たちは考えねばならない」
  - しかし、ケア経験を経た私は「あらゆる人は自分だけでは自分を守れない存在」だと主張したくなる（見えていない物が見えた）。

→「自分ごと」にできる人はどこにいるか？

# ケア：自力では生存できない人間の本質

## ケアの概念（J.トロント）

わたしたちがこの世界で、できる限り善く生きるために、この世界を維持し、継続させ、修復するためになす、すべての活動」あるいは「ひとが人間社会でひととして生きるために必要な、他者からの応答全般

## ケアされている＜わたし＞の日常

「雪国であれば朝早くから除雪車が道路を整備してくれ，公共交通機関では駅の構内から車両に至るまで，わたしたちを不快にさせないよう，そしてなにより安全のために，多くのひとが整備に携わっている」

（岡野八代「ケアの倫理」）

# InvisibleをVisibleにする仕掛け

- **ものごとがInvisibleになっている状態**
  - 悪意が働いているわけではない
  - 一方で、行為者（政策立案者、為政者、計画者、研究者）の価値観に基づいて計画され、遂行されている
  - その行為者が実は特権的な立場にあり、そうではない立場からの見立てを行うのが難しい
- **InvisibleをVisibleにするためには**
  - まずは行為者自身が自らの価値観を疑う（しかしそれは容易ではない）
  - 行為者自身が価値観を揺さぶられた時に経験した事実を記述し、共有する

# Implementation Gap Catalogue の試み

- **IGC（Implementation Gap Catalogue）とは**
  - 行為者が「実践のギャップ（IG）」を認識した際、時系列に沿って「何が起き、どう対処したか」を記述した記録の集合体
  - 単なる事実の記録ではなく、行為者の当初の期待と現実の乖離をセットで記述する
  - 行為者間のみならず、市民を含めたあらゆる参画者が参照・公表できる形にパッケージ化し、共有することを目指す
- **一般的なケーススタディとの違い**
  - 行為者の持論を裏付ける記録ではなく、期待が裏切られたことを記録する
  - 既存の理論の正しさを証明するのではなく、見えていなかったことが見えたという自己変容を告白する
  - 分析的なフレームワークの提示よりもコミュニケーションを通じた気づきの体験の記録